

平成23年度 妙高市音楽教育研究の取組

妙高市研究部長 中村 博子 (妙高市立矢代小学校 教頭)

「小・中連携に視点をおいた授業研究の取組」

1 妙高市教育研究会音楽部会の活動

妙高市では、「創造性豊かな文化のまちづくり」「芸術・文化の郷づくり」構想の一環として、「東京芸術大学の学生と市内3校の中学校吹奏楽部員によるコンサート」「けやきの森ジュニア合唱団」「妙高ヴァイオリン教室」「スタインウェイをマイピアノに」等、子どもたちが音楽に触れることのできる地域づくりが進められている。このような環境にあつて、市内各校ではいずれも音楽活動が盛んで、小・中学校の吹奏楽部・合唱部は毎年各種コンクールで上位の成績を収めている。

音楽部会が運営を担う市小・中・特別支援学校音楽発表会では、市内15校が一同に会し「とどけよう音楽の贈りもの」のスローガンのもと、各校の合唱や合奏、マーチング等を妙高市文化ホールのステージで発表している。特に、中学生の美しい歌声や迫力あるサウンド、磨き抜かれたマーチングの動きは、聴衆に驚きと感動を与え小学生の憧れとなっている。

また、音楽部では昨年「音楽科における小・中連携のあり方」をテーマとして、中学校1年と小学校6年の授業研究を交互に行っている。授業検討会では、中学校の音楽授業を踏まえて小学校段階で特に身に付けさせるべきものは何か、小学校での授業を踏まえて中学校でどのように学びの継続性を持たせるかについて、小・中の教員が意見交換を行っている。今年9月に行った新井北小学校6年生の授業研究について、以下にまとめる。

2 授業研究 ～新井北小学校 6年生「世界の音楽に親しもう」(今井洋太 教諭)～

本時は、修学旅行で訪れたリトルワールドでの体験を思い出し、そこで見学した韓国・ペルー・インドネシア・ガーナ等8カ国の音楽を聴いて、それがどこの国の音楽かを考える授業である。最初は音楽だけを聴いて、途中から楽器や演奏している様子の写真を手掛かりにグループで意見交換しながら予想していった。単に国名をあてさせるだけでなく、それぞれの曲の良さやその良さが何から生じているのかについて、教師が子どもたちの発言を引き出しながら全体での意見交換を進め、曲想や音楽を形作っている要素に気づかせていった。

参観者からは、「グループ活動になつても、子どもたちが音楽を聴くことに集中していた」「グルーごとに聴くのではなく、全員で同じ音楽を聴いた方が良かったのではないか」「せっかく本物の楽器があつたので、生の音を聴かせたかった」「国名を考えさせるよりも、資料を見ながら楽器を考えさせる方がよかったのではないか」「子どもたちの学び合いの姿が良かった」等の意見が出された。

3 授業研究からの考察

中学校学習指導要領には、鑑賞の「指導事項」として、中1では「我が国や郷土の伝統音楽及びアジア地域の音楽の特徴から音楽の多様性を感じ取ること」、中2・3では「我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の多様性を理解して鑑賞すること」と明記されている。一方小学校学習指導要領では、「鑑賞教材」として小学校5・6年では「我が国の音楽や諸外国の音楽等、文化とのかかわりを感じとりやすい音楽や人々に長く親しまれている曲などいろいろな種類の音楽」と示されている。

したがって、中学校における「音楽の多様性を感じ取る」学習のベースとなるのが小学校の鑑賞経験であることを、本授業研究で再認識した。そのために、小学校では我が国の音楽や諸外国の音楽の中で、「文化とのかかわりを感じ取りやすい音楽」「人々に長く親しまれている曲」等の視点から音楽を抽出して教材化を進めなければならない。その上で、まずは子どもたちをその音楽にまるごと浸らせる。そして、「もっと他にも聴いてみたい。」「自分も演奏してみたい。」「この曲について調べてみたい」と次の学習意欲につながるような指導の手立てを工夫していく必要がある。